様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年４月２０日現在

機関番号：15301
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2012
課題番号：22520364
研究課題名（和文）
宋詩に於ける唐代伝奇の文学的思想的影響の解明
研究課題名（英文）
A Research on the Influence of Tang Romance in Song Shi from Literature and Philosophy
研究代表者
岡本　不二明（OKAMOTO FUJIAKI）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
研究者番号 70152353

研究成果の概要（和文）：

唐代伝奇「枕中記」「南柯太守伝」は、人生に関する哲学的な主題を展開し、元・明の小説戯曲に大きな影響をあたえた。しかしその影響は、それより早く宋代士人たちの生き方にすでに認められる。黄庭堅は、「南柯太守伝」を老荘思想と結びつけ自らの生き方に昇華し、逆に陸游は「枕中記」の描く世俗的栄誉に反発した。本研究はこうした問題点を、宋詩の詳細な分析を通じて明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Tan Romance Zhen zhong ji and Nan ke tai shou zhuan showed philosophic themes about life , left a great influence in Yuan Ming novel and play . However I find this influence on intellectual's life in Song .Huang Ting-jian practiced what he learned from Taoisim and Nan ke tai shou zhuan . Lu you disliked worldly success that Zhen zhong ji described . By detailed analysis on Song shi , this study clarified those issues .

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	200,000	60,000	260,000
総　計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・中国文学
キーワード：唐代伝奇・宋詩・枕中記・南柯太守伝・黄庭堅・夢物語・芭蕉・比較文学

１．研究開始当初の背景

唐代伝奇小説はそれ自体すでにかなり研究の蓄積があり、また後世、とりわけ元明以降の戯曲や白話小説に対する大きな影響についてもいくつかの先行研究が存在している。

この影響という場合、唐代に続く宋代が見

落とされがちであったのは、伝奇体の文言小説が不振であったという一般的な文学史的な通念がおそらく働いていたことは間違いない。北宋ではたしかに「太平広記」五百巻のような大部の小説集が編纂されたが、それは集大成という意味では優れた成果であったが、オリジナルな小説の創作という点では、質と量のどちらに於いても格段と見劣りした。また南宋では「夷堅志」四百二十巻のような膨大な説話集も編纂されたが、民間からの採取が大部分であり、知識人による洗練された唐代伝奇小説とは比較にならないレベルであった。

しかし唐代伝奇小説が、宋代の小説の分野でまったく受け継がれず、影響力をもたなかったかというと、決してそうではない。

宋代士人がしばしば唐代小説を読み、受容した形跡は、唐末の小説集「異聞集」が宋一代を通じて流行したことが示すように、容易に確認できる。たとえば主要な宋人の詩集をひもとけば、そのなかでしばしば典故として唐代伝奇の故事や表現語彙が使われていることに気づこう。唐代伝奇は、宋代士人の生活の中に浸透し、時に彼らの生き方にも大きな影響を与えた場合もあったと思われる。

唐代伝奇小説のなかでも「枕中記」「南柯太守伝」の両作品は、未だ見ぬ人生を語る夢物語として、構想や表現や設定の点できわめて完成度が高く、その哲学的な主題は、官僚として大部分が生きねばならなかった宋代士人たちに、深い衝撃をもたらしたことと思われる。

今回の研究では、こうした唐代伝奇が宋代士人にあたえた、文学的レベルから精神的レベルまでふくめたところの影響を、具体的実証的に掘り下げ、解明したいというのが最大の動機である。

従来こうした視点からの先行研究はまったくといっていいほどなかったので、参考になる資料や文献は皆無に近いが、クリエイティブで独自の研究地点を追求していきたいと考えたのである。

２．研究の目的

研究の目的は上記でもすでに一部言及したが、次の二点にほぼしぼられる。

一つには、唐代伝奇の代表的な作品である「枕中記」「南柯太守伝」が、北宋と南宋の士人たちの詩・文・詞などに、どのような形で受容されていたのかを、網羅的に調査し、また同時に個別の主要な詩人について具体的に分析し考察することである。

二つには、そうして得られた詩人たちの傾向や特性を把握したうえで、宋代全般を通してどのような変化がそこにみてとれるのかを分析し、その現象の原因や意味を考察することである。

３．研究の方法

近年刊行された「全宋詩」などを使い、まずトータルに概観し、さらに個別の主要な詩人については別集で確認して作業をすすめた。代表的な士人に関しては、詩文に関して語彙や表現から思想のレベルまで徹底的に調査した。CDROMによる各種の宋詩や宋詞などの語彙索引も利用した。

それらの一次的な調査から、まず主要な詩人を洗い出して選んだが、結果としては欧陽修、王安石、黄庭堅、蘇軾、陸游、范成大、劉克荘などをピックアップした。いうまでもなく時代ごとの特徴や傾向と詩人個人の特徴の双方から考察する必要がある。

また代表的な詩人だけでなく、中小の詩人群についても全体的な見通しをたてて、宋代全般をいちおう概括できるように調査しデータを作ったが、残念ながらその分析に関しては今回間に合わなかった。次の機会を期したいと思う。

４．研究成果

唐代伝奇小説の後世への影響は、多くが元や明の小説戯曲との関係で従来は論じられてきた。唐代のすぐあとの宋代への影響は、伝奇小説の不振もあって見過ごされてきたといっても過言ではない。

本研究はこの点に着目し、唐代伝奇、とりわけ「枕中記」「南柯太守伝」の両作品が、宋代士人に広く受容され、その生き方についても大きな影響を及ぼしたことを、宋詩の分析を通して明らかにしたものである。

具体的にいえば、黄庭堅や蘇軾や陸游や劉克荘など当時の一流の知識人に関して、好悪の差はありつつも、それぞれの人生観に大きく関与していたことが分かった。

欧陽修はほとんど典故の用例がなく、つづく王安石も「枕中記」に興味を示しつつ、その典故の用例はあくまで表面的なレベルにとどまっていた。

黄庭堅や蘇軾は愛好した「荘子」の思想との関係から、両作品に深い関心を有したが、とりわけ「南柯太守伝」に言及することが多く、蟻の穴と夢の世界という奇想に傾倒した様子がうかがわれる。彼らに於いて両作品は深い受容レベルに到達したと推測される。この二人がとりわけ夢を語ることの多い「荘子」の哲学の愛好者であることと、密接な関係があったことは間違いない。

逆に現実主義者であり農村生活を愛した陸游は、架空の夢も世界を描いた物語には反発を示し続けた。そうした栄耀栄華の物語は、彼にとって空想以外の何物でもなく、現実の不遇を慰める手段には少しもならなかったのである。

同時代の范成大は、陸游に比べて都会育ちで官僚として出世したこともあり、彼は両作品のなかに現実の裏返しの教訓として意味を見いだしていたように思われる。

南宋後期の劉克荘にいたると、「枕中記」「南柯太守伝」の語彙や表現が、挽歌など死者をいたむ詩詞の典故に数多く使われているのが特徴的である。二つの夢物語の伝奇小説が、ここにいたってにわかに冥界性を帯びるという変化を遂げていくことになる。劉克荘にとっては、死者の冥福を祈念する際に、かつての生前の不遇な生き方であっても、栄耀栄華の夢ととらえることで、死者を慰撫するつもりであったのであろう。

以上、三百年以上にわたる宋一代を通じて、「枕中記」「南柯太守伝」という二つの伝奇小説は、さまざまな受容のされかたをたどったことが、大筋として分かったのは一つの大きな成果だと思われる。今後は、詞の分野での調査と群小詩人たちの動向が残された問題点である。

なおその影響が「荘子」と結びついてもっとも濃厚な黄庭堅に関しては、遠く本邦の江戸時代の芭蕉の俳句にも影響関係が認められることが判明し、その具体的な例を挙げることができた。本研究の副産物といえよう。

なお本研究の一部は全国学会誌である「日本中国学会報」などの書評に取り上げられ、注目されたことも付言しておきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

① 岡本不二明　宋詩にみえる「枕中記」の影響について、岡山大学文学部研究紀要、査読無、58 号、2012、P27-41

② 岡本不二明　芭蕉と夢―尿前の関の句をめぐって　査読有、中国文史論叢、8 号、2012、P147-156

③ 岡本不二明　審雨堂の謎―「南柯太守伝」異聞、岡山大学文学部研究紀要、査読無 2011、56 号、p25-36

④ 岡本不二明　唐代伝奇「南柯太守伝」に於ける夢と時間の一考察、査読有、中国文史論叢、7 号、2011、p41-56

⑤ 岡本不二明　王侯と螻蟻―昆虫たちの文学誌、岡山大学文学部研究紀要、査読無、54 号、2010、p123-134

〔図書〕（計１件）

岡本不二明、汲古書院、唐宋伝奇戯劇考、2011、508

６．研究組織

（１）　研究代表者

岡本 不二明（OKAMOTO　FUJIAKI）

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授

研究者番号：70152353

（２）　研究分担者

なし

（３）　連携研究者

なし